

パネルディスカッション

コーディネイター	宇都宮大学工学部	今泉 繁 良	教授
パネラー	宇都宮大学国際学部	北 島 滋	教授
	宇都宮大学教育学部	陣 内 雄 次	助教授
	氏家町議会議員	加 藤 朋 子	氏
	氏家町行政区長会長	菊 地 崇 雄	氏
	元(株)よし野工業部長	関 忠 司	氏

黒須課長 コーディネイター・パネラー紹介

今泉教授（コーディネイター）

ただ今から2部の方に移らせていただきます。1部で陣内先生にわかり易く事例を紹介していただきました。その中で氏家町のごみが塩谷広域の中でも増えていると指摘をされました。また先進事例の中で、目標を持って市民と行政がお互いの情報を的確に公開する中で関係を作っていくことが、ごみ問題を解決していくのではないかと、そんな指摘をされたわけです。この地元氏家においても、まだまだ芽は小さいかもしれませんが、家庭の立場、区長会の立場、あるいは企業の立場においてそれぞれ努力をされておられます。まずお三方に、努力している内容や問題をお話いただきたいと思います

加藤氏

私は別名『月1ごみ出し女』と呼ばれておりまして、最近はグレードアップして1ヶ月半くらいになりました。その秘密は簡単でして、ゴミ袋を大きくしたという単純なものでした。でもやっていることというのは普通のことです。

まず、1ヶ月半のごみ出しですと生ごみをどうするかということです。生ごみは堆肥にしておりますが、私は町から助成金をもらいましてコンポストを買って裏庭に置き、どんどんそこに捨てています。たまに土を掛けますとウジが湧いてこないのです。生ごみ自体も他の家庭より少ないと思います。というのは、私は怠慢主婦ですから、野菜は皮をむかずにそのままお腹に入れます、そうすると食物繊維がとれていいウンチが出ます。うちには良く食べる家族が居りますので腐らせる前に食べてしまいますから、生ごみ自体が少ないのだと思います。その他のごみは腐りませんので1ヶ月半くらい置いても大丈夫なんですよね。

残りのごみをどうするかといいますと、徹底的に分別します。リサイクルに出せるものは出します。例えばスーパーから貰う白いトレイはざっと洗って干して、スーパーの回収ボックスに入れます。それから新聞紙はまとめて町の回収場所に持ってきます。ダンボールもそうですが、残りの雑誌や雑多な紙、これはレシート1枚逃さず全部雑紙としてリサイクルに出します。そうすると縛れないのでデパートの袋に入れて、最終的にそれを縛って出します。それからペットボトル、資源ごみとしてのビン、缶ですが、アルミ缶は

学校に持って行きますと喜ばれます。それから、洋服類に穴の開いたものは雑巾にして1回使ってから出すとか、主人が自動車関係のエンジニアですので、会社に持って行ってウエスとして有効利用してくれているようです。まだ使える子供用品などは、近所や知人のお宅へさしあげたりしています。そのほかは、最近ハマっているネットオークションに出して楽しんでます。また、町の不用品交換ボードに登録して、持って行ってもらったりしています。それと町のホームページにも掲載できますので、それを見て申し込むことができます。あとは個人的にやっているリサイクルショップやフリーマーケットにも時々参加して不用品を処理しています。

最後に、皆さんはあまりやっていないと思いますが『圧縮技』というのがあります。ごみのごみ箱一杯になると足で踏むのです。そうすると半分になります。これだけでも2週間に1回のごみ出しが4週間に1回になります。ごみの総量は変わらないですが、ごみ出しの手間が省けるわけですので、ぜひこの一手間を付け加えていただきたいと思います。

話を聞いていて皆様は「常識よ」という顔をしているんですが、ごみ問題に関心のある意識の高い方ばかりなんで、こういう話をしても釈迦に説法かなとは思いますが、でも私は、今度ごみのスリム化道場を開いて「かかっていらっしゃい」と言おうかなと思っております。しかしここにいらっしゃる皆さんに考えてもらいたいことは、私達以外でごみのことを考えずにいる人達に知らせる方法はないものか、またそういった人達にどう言ったらこっち側へ入っていただけるか、これを考えていただきたいなと思います。それと氏家町は他と比較してごみ量が突出しているのは恥ずかしいことで、同じ氏家の住民として松島の人達に申し訳なく思います。

人を動かすのは飴と鞭と言われますよね。鞭と言いますと、ポイ捨て禁止条例ですとか、行政としていろんなことができると思います。先ほどのデータなどを示して「皆さん恥ずかしいから、ちゃんとやりましょう。」と言うことができると思います。それだけじゃ動かない人っているんですよね。そういう人達に飴を示して誘い込むかってことを、私なりに考えてみました。人を動かすには情に訴えるとか、そういったことが必要かなと思います。私達のごみで焼却場のある松島の方が苦労なさっている、いろんな我慢を強いられる、そう言った「何とかしなくてはいけないよ」とハートに訴える部分も必要かなと思います。もっとチャラチャラしている人には、「楽しいよ、嬉しいよ、おいしいよ」とかそういうモチベーションというか、動機付けを与えてあげるのも良いかなと思います。それと行政区ごとにごみを減らしたチャンピオンを決めるとか、競争させて負けたほうに罰ゲームをさせるとか、そういった楽しいイベントみたいなものを考えるといいと思います。私の持論ですが、ごみの減量などは一度始めてしまえば進むと思います。最近始めたガラス瓶の分別なども、始めた当初は面倒くさいとか、判らないとか言っていたんです。でも、今は皆さん普通にやっているわけです。ですから習慣になってしまえば何のことはないわけです。そのようにすることが、私達がこれから考えていかななくてはならないことだと思います。

菊地氏

私は区長会の方から、ごみの現状やら、将来このようにしたら良いのでは、とのことについて気が付いた点などをお話させていただきます。

皆様のご協力により収集活動を行っておりますが、その取り組み方についてです。分別収集については、2～30年前からですが、不燃ごみ、可燃ごみ、粗大ごみ、生ごみということで皆さんの協力を得ながら収集しています。その中で、最近リサイクル問題が環境の中で出てきまして、ビンのリサイクル、紙類のリサイクルがされています。粗大ごみはいろいろと問題がありましてリサイクルまで入っておりません。生ごみにつきましてはコンポスト、あるいはボカシによる堆肥化をいたしまして、家庭菜園に利用していただければ環境にも優しく、リサイクルにもなると思い推進しているわけです。しかしこれも、地域住民の理解が得られなければごみは減っていかないのかなと思っております。最近問題になっておることは、人づくり、教育の問題、モラルの問題かなと思います。例を挙げますと、用水掘等に粗大ごみである自転車やバイクやらテレビなど大変な量が捨てられております。それを片付けるのが私達の仕事になってしまっています。今年も農閑期で人が水田にいない時にビデオテープや布類が束になって捨ててあり、私達は少しずつ処理をしているところです。それは奇麗事ではなくて、小さな予算で幸せな生活をするということが大前提ではないのかなと思います。私達は人づくりに力を入れまして、皆様と共にごみ問題に取り組んでいかななくてはならないと思います。これからも皆様のご協力を得まして、ごみを少なくし、環境を良くし、住みよい地域づくりをしていかなければならないと思っております。

関 氏

ペットボトルの企業といたしましてお話をさせていただきます。先程町長さんがお話しされました大量生産、大量消費ということから環境問題が挙げられてくるわけですが、通信販売やスーパーを見てもわかるように消費者が選んで勝手に持っていくという利便性の裏には、必ず余計なものまで買い込まれるということになりますが、その結果、ごみになっていくわけです。しかし国民が何を望むかというやはり利便性で、また「昔に戻れ」と言ってもできないことです。割烹着を着て、買い物籠を持って、新聞に包んでもらうような生活には戻れないわけです。

この前北朝鮮から帰ってきた子供さんが「小泉首相と同じジュースを飲んでもいいのか」と質問されたと言っておりますが、お国柄の違いはありますが、それだけ日本という国は総理大臣だろうと一庶民だろうと、同じ食材を食する環境をもっているわけです。その利便性を獲得している裏には必ず廃棄物が出てくる、しかしそれは自然の成り行きだと思います。資源のない我々としてはこの成り行きをどこで止めるかといっても難しいことです。使えるものは使う、リサイクルできるものはリサイクルする。そこで私は現役の時代から、ペットボトルをリサイクルすることに拘わってきたのでお話しします。

1977年にキッコーマンのお醤油の500ccのボトルを世に出したのは、実は私が勤務していた会社が最初だったのです。普通のプラスチックというのは

燃やしますと1万kcalくらいの熱量を発するんですが、ペットボトルは5千kcalくらいの熱量です。これは木材とか紙と同じくらいの熱量です。これらは同じ石油を原料とした兄弟ですが、ペットボトルの構成は水素と酸素と炭素の3つの元素でできているんですね。そのペットボトルを燃やしますと炭酸ガスと水に分解してしまいます。皆さんも聞いたことがあると思いますがプラスチックには『エンビボトル』というものが混ざっており、ビニールハウスのビニールには塩素系のものが使われております。昔はあれを畑で燃やしておりましたが、あの煙だとまわりの稲などは枯れてしまいます。それと比べるとペットボトルは何も混ざっていないので、非常に優しい素材なんです。

ペットボトルは、飲料関係と醤油とお酒だけはリサイクルできることになっており、化粧品などの容器にも使用されておりますが、飲料関係と醤油とお酒のみ分別収集の対象になっております。今1年間に43万tがボトル化して世に出ており、この500ccのボトルでは約150億本くらい生産され、そして24.5万tが自治会等を介して回収されております。これは生産全体の55.6%の比率になります。世界的にみると大変な比率で、こんなに回収率の高い国はないんですね。私は今、皆さんが集めて自治体さんが回収したものをリサイクルする工場のアドバイザーとして勤務しております。今日は、うちの会社でリサイクルしたネクタイやワイシャツを着ておりますが、回収したものすべてがこういった原料にはならず、色物やキャップがあるため総重量の約75%くらいが原料にできます。11か12年前の容器包装リサイクル法という法律ができる以前に、九州のほうの自治体さんを回って分別回収をお願いして歩いたんですが、経費がかかるなどの理由で2~3の自治体を除いて断られてしまいました。

実は質の問題なんです、この塩谷広域さんは間違いなく綺麗です。ペットボトルのリサイクルは国の認定を受けた者しか扱うことができないので、全国59の事業者がありますが、毎年この59の事業者の入札なんです。そして国で振り分けてもらうシステムなので、今年の3月までは塩谷広域さんのものを私の会社が扱っていましたが、残念ながら今年はとれませんでした。

氏家町は残念ながらごみが多い。これは行政だけに責任を持たせることなく、住民の責任だと思います。氏家町には広い農地があり、そこで農薬をやたらに使っていたら、すぐには出ませんが何年後か、もしくは孫子の代になって弊害が現れて来ることでしょう。こういう問題を真剣に考えているんだらうかといつも気になっております。今日入り口の所でボランティアの方が集まってEM菌のPRをしていたようですが、こういうことを1つ1つやるのが大事なんです。そしておいしく安全な野菜作りを行政とタイアップして進めていかなかったら、今後、食の安全は保てないのではないのでしょうか。

現在私のいる工場には、保育園の子供から小学生中学生、そして老人大学のお年寄りが年間3,000人くらい来ます。大体私が説明を担当しておりますけれど、みんな熱心に聞いてくれます。今のお母さんの年代になりますと、大量生産、大量消費に慣れた世代に当たり、余ったものは捨てればよいよという方が多いだらうと思います。ですから、節約とか分別とか言っても、言うことはわかるけれど現実に伴わない場合があるわけです。これからの将来

は子供さんが、節約とか分別とか、そういうものを文化として育てていただかないと良くなっていかないだろうと思います。教育の問題でも、もっともっと取り入れて、より良い町づくりをやっていただきたいと思います。ましてや桜市になるんですから綺麗な町にしたいと思います。

今泉教授

以上でお三方の経験を発表していただいた訳ですけど、こう言ったご意見をお聞きして、北島先生から努力してもなかなか減っていかない現状、その辺をどういうふうにしていくのか、コメントをお願いいたします。

北島教授

昨日考えていたことですが、氏家の可燃ごみは平成10年度を100としますと、54.8%増加しています。どうしたことなんですかねということが昨日から頭にありました。今日お三方からの話を聞いておまして、加藤さんからはごみのスリム化道場ということ、ごみは松島、小入、早乙女の皆さんのおかげだということ、菊地会長さんの方からは人づくりのモラルですね。水田の用水に粗大ごみを捨てる、これは溶け出すと重金属汚染になりますが、こういうことが平然と行われているとのことですね。これは塩谷広域以外の人をなせる業だと思いますけれど。教育によって意識改革を進めることですかね。私はもともと社会学ですから、どうやったらよりよい共同生活が営めるかというのが商売です。社会学の見地から、社会というのはお互いの感謝でもって支え合っているということがないと、社会は解体していくと思います。痛みが痛みとして感じられることがなぜ欠落していくのかなということがあるわけですね。例えば、家庭の中でも「俺が居るのは君のおかげ」と夫婦間に感謝の意があるわけで、その感謝がごみを通して、向こう三軒両隣、それが自治会活動、自治会連合会活動と繋げられるはずなんですね。

私はごみ問題を通してある種の体験があると、もっとより良くごみ問題を理解できる、感情的にも理解できると考えます。人間というものは感情移入できますからできると思います。ごみを無くすことはできないことですが、考えてみますと最終処分場が無くなれば、焼却炉を無くさざるを得ないわけですよ。そうするとごみは出せないわけですから、ごみを出さない生産システムを考えなくてはならない。こうなればいいんですが、それができない。というのは恐らく家庭でも隣近所、自治会相互でも考えてないことの現われだと思います。個々では努力しているんですが、それが共感しあっていかないことはなぜだろうかなと思うんです。

そこで僕はこういうことをやったら良いと思うんですね。この間、板戸の最終処分場を見学して来ました。55億円で作っていますが、関連経費を入れますと100億です。15年もちます。ただしその後もランニングコストが掛かりますから膨大な経費になります。今度、松島地区体験ツアーを町内会ごとにやって、「俺たちは皆さんののおかげでごみが出せるんだ、じゃあ少なくともなければいけないよね」と共感しあえる形をつくと同時に、焼却炉で困難を極めている松島の人達と、それ以外の氏家町の人達が円卓を囲んでディスカッションすべきだと思います。

最後に陣内先生がお話した『氏家町へのラブレター』、これは違うと思いま

すね。松島、小入、早乙女地区へのラブレターでなければだめだと思います。
今泉教授（コーディネイター）

お三方及び先生方に意見を述べていただきましたが、会場の方で陣内先生や地域の代表の方に是非とも伺っておきたい、あるいは「普段自分はこう思っているんだけど」というご意見のある方は発表していただきたいと思います。

会場（森嶋氏（町内））

ごみは出さないで、できるだけ再利用するということに尽きると思います。八戸の屋台村の話があったもんですから、タバコの吸殻はどうなっているのかということ陣内先生に質問したんですけど、それは再利用していないということでした。去年のタバコの消費量が日本で3000億本なんですね、吸殻はだいたい1gくらいあると思いますので、年間30万tになります。再利用や生ごみにはなりません。生ごみに混ぜるとミミズや団子虫が死んでしまいます。タバコの葉っぱは、1本で赤ちゃんが死んでしまうような毒があり、フィルターは自然界では分解されなくて川に流されて海辺に溜まります。非常に問題なものなんですね。

ダイオキシンの発生は1番がごみ焼却施設で90%を占めますけれど、第2位が燃えているタバコの煙で0.4%なんですね。葉っぱが燃えるといっぱい発癌物質が飛び散り、ダイオキシンよりもっと猛毒なものが入っています。これをどうしたらいいかということをお教えいただきたい。

昨日氏家駅に行きましたら禁煙になりまして、町長さんがいらっしゃるので聞いて欲しいのですが、もともとは駅前に灰皿があったんですね。それが無くなって、駅前がどうも汚いと思っていたらそれが原因だったんです。今は駅の前だけでも30本~40本吸殻が落ちています。放っておきますと海まで流れて行きますので、これをどうしたらいいかお教えいただきたいと思います。

今泉教授（コーディネイター）

私もタバコは吸わないのでどなたかお答えいただきたいですが、陣内先生どうですか。

陣内助教授

私もタバコは吸ったことがないので、吸う人の気持ちがわからないんですが、実はタバコがそんなに問題だっていうことを初めて聞きまして大変勉強になりました。タバコを駅で禁止したらその周辺が汚れてしまった、これはタバコに限らずごみの性質だと思うんですよ。例えばこの建物の中でこういうごみはだめですよって言ったら、周辺にそのごみが散らばる。意識を根本的に変えていくということをやらない限りは、タバコのポイ捨てに限らずイタチゴッコで、どこかにごみを散らかしていくのだと思います。どなたか言っておられた情緒的に訴えるとかですね。私は昨年度から環境教育コースも担任しているのですが、決定的に思うのは環境に関する教育であるとか、そういうことに関する体験ですね、経験をしているということが重要なことです。自分がある行動を起こすことで問題が発生するかどうかを感じ取れるとかですね、それをやるしか根本的な解決にはならないと思います。タバコ

の消費量を減らすということがあるんですが、そうすると自治体に税金が入ってこないことになりますので・・・お答えにはなっておりませんがそういうことを感じております。

今泉教授（コーディネーター）

もう一方手を上げられました。ハイッ。

会場（岡田松島区長）

松島の住民としては、今まで煙のダメージを受けてしまった環境を回復し、8年後には移転されてごみの煙を吸わなくなることを望んでいるんです。松島の処理場は昭和53年から始まったんですが、し尿処理の煙突2本とごみ処理の煙突が1本との計3本の煙突で処理が始まりました。始まった途端に気象条件で東風が吹いて、さらに雨が降った時は煙が地べたに落ちてしまうという苦しい日々を過ごしたこともあるわけです。当時は環境基準も緩かったものですから、ダイオキシンは基準に入らなかったんですね。ダイオキシンは積立貯金みたいなもので、蓄積され、少しずつしか体からは出て行かない。さらに聞くところによると染色体を攻撃するという特別なボーナスも付いてくるということです。私達は、一刻も早く煙を吸わない環境を取り戻したいというのが願いなんですね。これから8年ありますので、プラスチックなどの分別収集を徹底して、ごみの量も減らしてもらいたいです。今は24時間体制で燃やしていて、さらに日曜も燃やしているんですよ。地元住民としては減量化していただいて煙が止むときも欲しいと思います。

今泉教授（コーディネーター）

北島先生の話にもありましたが、痛みのわかる社会のしくみを目指していかななくてはいけないと思います。説明にもありましたとおり、25年以上一つの地域にごみ問題を押し付けてきたわけですから、何とか早く解決していかなければいけない。今回のシンポジウムもそれを大きく見越した上での開催ですので、然るべき住民の合意のうえで対策ができていければと思います。そのためには、ここにご出席された皆さんが、先ほどから議論されていますように分別収集とかごみの減量化を是非進めていかなければならないと思います。それではもう一方。

会場（細田氏（真岡市））

私この地域の住民ではないのですがよろしいでしょうか。先程から聞いておりますとビデオテープとか衣類とかが不法投棄されていると伺いました。私も真岡から来たんですがその現状はわかります。真岡の場合には捨てる日が決まっていて、捨て場に捨てることになっていますが、多分この地域もそのようになっているとは思いますが、しかし、そうなる原因は「どう捨てたら良いのか」ということを行政サイドから住民側に伝えられていないのではないかと思います。

それに関連してですが、家電品リサイクルの時に栃木県の全部の市町村の記事が新聞に出ていたのですが、ある地域は今までと同じように捨てられるシステムできちんと対応してくれている市町村がありました。それからある町では、500円か800円か忘れたんですが、それを納めれば今までどおり家電品を引き取りに行って捨ててあげますときちんとした行政サービスの計画

を立てた町もありました。残りの多くは法律どおりですから市町村は一切関知しませんと、このように色んな行政サービスの格差が生じているんですね。

ところがその行政サービスの格差がなぜ生じるのか、その格差をどうやったら良くできるのかについては一切公開されないんですね。私たち住民は格差がどうしてできるのか、あるいは住民がどんなふうに協力したなら格差を埋めることができるのか、県下の全部の市町村が情報を公開して検討する場が全然ないんですね。先ほどの不法投棄の話でも、行政から住民にお知らせするシステムが欠けていることが現状だろうと思います。ごみの問題は半分以上が我々住民に責任があることを私は認めます。今お話したように行政と住民が、どうやったら同じ土俵の上で議論できるのか、そういう場をつくるということは個人としてはなかなかできないんですね。ですから今日お集まりの皆さんにお願いして私の質問といたします。

今泉教授（コーディネーター）

貴重な提案ありがとうございました。今の質問と共通しておりますが加藤さんのお話にも「ごみの減量化のために町の補助を受けた」とありましたので、唐突で大変申し訳ないんですけど氏家町の環境課の方に、今の質問者の回答と、不法投棄されたごみの収集情報をどのように流しているのかの話や補助制度などのごみ政策的なご紹介をお願いいたします。

樋山課長

自治体の住民のサービスの公平性につきましては、自治体によって様々であることは確かにあると思います。家電4品目である冷蔵庫、洗濯機、エアコン、それに最近冷凍庫も加わっていますが、家電リサイクル法に基づきまして適正に処理しなければならないということになっております。それらについて当町は補助は出しておりません。周知の方法といたしましては、広報誌等によりまして住民の方に適正に処理するようにお願いしております。

粗大ごみの排出につきましては町でPRしまして、ごみの日程表に掲載しております。こちらにつきましては引き取り価格を条例にもとづきまして千円～4千円の範囲で引き取っております。また処理施設に直接搬入される場合には料金がさらに低料金となるわけですが、1市4町においては同額になっております。ですから町のほうで費用を出して処理するのではなく、受益者負担との観点でお願いしているところであります。

会場（細田氏（真岡市））

行政の立場はそれぞれ理解できるのですが、真岡とここではサービスの格差があるわけですね。それぞれ住民が、「私達はあそこよりいいんだ」、逆の立場の人は「何で行政サービスに格差があるんだ」となることについて、同じような税金を納めているはずなので、サービスの格差が生まれないようにお願いしたいのです。それぞれ地域の自治体がどうやったらそこに落ち着けるのか、我々住民がどういような協力をすればいいのか、それを同じ土俵の上で議論できるシステムを作っていただきたいと思っております。この町にお願いしてもしょうがないんですが、先生方はあちこちにいらっしゃるのですからお力を拝借して、住民と行政と一緒に考えられるシステムができればと考えております。

今泉教授（コーディネーター）

行政の格差ということと、もう一つは行政と住民がいかに親密に情報交換をしていくかという問題が提起されてると思うんですが、その辺を陣内先生、北島先生、それぞれご意見お願いします。

北島教授

私は北海道から渡ってきたんですけど、今の問題は正直申しまして、どこの地域もというのではなくて、栃木県の場合は行政から住民に対してトップダウンの仕組みが強いのではないかと思います。一般論では、住民が動かないと行政は動かないというのが栃木の特性かなと思います。その突破をどうするか、私はここ20年くらいいろいろやってきましたけれども、さっき松島地区の住民の方がお話ししましたが、松島地区の方と小入・早乙女地区の方々との直接対話型で一つは動いていく、そうしないと権利だというふうになる可能性があるんですよ。自分は利益を得るけれども松島の皆様にとっては苦役なんですよ。これを昭和53年以来我慢せよというのが基本的な考え方で、焼却炉が存在している氏家地区でこの問題を真摯に考えられないと、それ以外の市や町はもっと深刻になって考えられないと思います。それから小野町の最終処分場についてインターネットで調べてみたんですが、あそこは山に囲まれた盆地みたいなところなんですけど、あそこの町民の方々にとってもこの問題については大問題で、最終的には今みたいな形でできているわけですが、小野町の皆様がNOだと言った時に我々はどうしますでしょうか。そうするとごみの減量がいかに重要なのか分別収集が如何に大事なのか、そのことが氏家の町で『共感し合えるような町づくり』それを僕らはゴミニティーと言ってますが、塩谷広域管内の1市4町はこれをきっかけに新たな町づくりのため、痛みが分かち合える社会を作る一番のチャンスではないかなと思います。そうすれば先ほど真岡の方がご質問していただいたことも、タックスペイヤーとしては多少あるんだけれども、そういう社会が出来上がれば多めに払ってもいいやというふうには我慢できると思います。そういう社会がなぜできないのか真剣に考えるべきです。これができなければまた栃木県のごみ問題は解決できずに、構造的にずっといつてしまうのではないのでしょうか。そんなふうにご考えております。

陣内助教授

私もよそから来たんですけど、栃木県の行政の感覚は北島先生と一緒に、トップダウンかなとすごく感じているところがあり、それを何とか変えないといけないと思うんです。私は、自治体からの委託の仕事を受ける時には研究室で受けることにしているんですが、その際、担当の方とよく喧嘩をすることがあります。担当の方がうちに来る時に「委員会形式でちょっとそれを作りますから」とか言うと、「住民を馬鹿にするんじゃない」と怒鳴りあいになります。「きちっとやらなければうちは付き合わないよ」と、それで決裂になる場合や徹底的に付き合うかのいずれかになります。それをどういう仕組みでやるかという、行政・議員・住民が同じテーブルについて本音で議論できる場を必ず作らせます。誰が一番大変なのかというと参加した皆さんが一番大変なんです。あるところは十数回会合を持ちました。それ以外にも

自主的な会合を持ち、計画の中身も皆さんが考えました。そこは今どうなっているかと言うと、新しい市民グループを立ち上げましてその計画を行政と一緒にやっっていこうと動いています。

従来のやり方では絶対に動きません、ごみ問題もそうだと思います。北島先生がおっしゃられたように誰かに押し付けてしまっているという現実、まさに、氏家町や塩谷広域では焼却場のあるところに問題を押し付けてしまっているわけです。ですからこれから自分達の問題として感じられる議論の場をきちっと作っていく、そして住民が参加できる機会を平等に保障するという、これは行政が頑張らないとできないですよ。それに皆さんが努力してやっっていかななくてはごみ問題もいつまでも解決していきませんよ。

事例を上げますと、武蔵野市のクリーンセンターが出している『これしか出せないの!?ゴミ袋』(小さなゴミ袋を示して)これは何なのかわかりますか、武蔵野市では日出町の二つ塚最終処分場に焼却灰を持って行ってます。この袋は武蔵野市市民が1日に捨てるごみの量はこの袋に入るだけです。その処分場にお願ひできるのはそれだけなんですよと目に見えることを示して訴えており、まさに痛みをきちっとわからせることはこういうことだと感じました。「実態はこうなんだよ」と誰かがやっっていかななくてはならないと思います。そうしなければ、いつまでも自分達の問題として感じることはできないだろうと思います。

今泉教授(コーディネイター)

10分くらい超過してますが、最後に加藤さん、先程は家庭の代表という立場でご発言していただいたわけですが、町議会議員として先程から出ておりましたように、これから住民と行政の対話をいかにして進めていくか、間に立っていくのが議員さんであるかと思うので、ご自身の抱負で結構ですのでお話いただきたいと思います。

加藤氏

私は『ごみ出し月一女』といたしまして、いろんなところで「こうしてるよ」と話しています。大体皆さん「ああそうなのか、私もやってみようかな」とおっしゃるんですが、あまり続かないんですね。残念ながら、なかなか相手の生活様式を変えさせるところまで持っていけないのはジレンマではありますが、今までの「言葉で訴えて行くやり方では足りないのかな、どうしたらいいのかな」と悩んでますが、このシンポジウムに新しいヒントなりアイデアなり得られればなと思って参加しました。住民として行政を動かしていくこと、議員としてはもちろん職務ですから大事です。先程先生がおっしゃったそういった場を設ける、これは大事なことだと思います。私達一人一人が松島の人に対して、ごみを出してる加害者であるとの意識を持ってもらう、ごみを出す時に「このごみが松島の人達に迷惑を掛けているんだな」との気持ちを持ってもらえる、そういう場を持ってもらうよう町長にもお願いいたします。本来私たちが一番ごみを減らさなくてはいけない、そして松島の人達の痛みをわからなくてはいけないはずなのに、この5年間でごみは50%増えている、これはもう危機的状況だと思います。私もどうしたらいいか即答できないのですが、今までやってきたこと以外に何かできることはないか、

これから家に帰って考えてみたいと思います。それによって行政を動かしたいと思いますので、町長を始め環境課長さん、そしてここにいらっしゃる皆様、頼りにしたいと思います。ここに足を運んでくれたということは意識のある方ですから、これからの町のごみ減量を担っていく核となる方だと思いますので、頼りにさせていただきます。そして私達に、また行政に知恵を貸して下さい。

今泉教授（コーディネーター）

時間の超過にも拘らず最後まで熱心にディスカッションに参加していただきました皆さん方に、司会者として感謝の意を表したいと思います。それからいろいろと話題を提供していただきました5人のパネラーの方に、感謝の意を込めて大きな拍手をお願いいたします。